

豆類の病害虫防除について

7月1日現在、豆類の生育は大豆・小豆・金時で平年より2～4日早く、手亡では平年並に生育しています。

灰色かび病は開花始以降の低温・多湿条件で多発し、菌核病は開花始以降に曇雨天が続くと多発します。

開花始の平年値は以下のとおりですが、は種日・品種によって前後するため、ほ場をよく観察し開花始を把握しましょう。

表1 7月1日現在の生育遅速と平年の開花始（十勝農改本所）

	大豆	小豆	金時	手亡
生育遅速（日）	+4	+2	+3	±0
平年開花始（月日）	7/17	7/23	7/14	7/21

耐性菌の発生を防ぐため同一系統の薬剤の連用は避けてください。

また、マメシンクイガやアズキノメイガ、食葉性鱗翅目幼虫の被害が多い場合は、下記の防除体系を参考に殺虫剤も組み合わせて適期防除に努めましょう。

表2 大豆防除体系例（菌核病・マメシンクイガ・食葉性鱗翅目幼虫）

防除開始時期		防除薬剤	倍率	系統名
1回目	開花始後10～15日	プライア水和剤	1,000	Nフェニルカーバメート・MBC
		プレバソフフロアブル5	4,000	ジアミド
2回目	1回目防除後10日	ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000	QoI
		ゲットアウトWDG	3,000	合成ピレスロイド

※ 大豆のカメムシ類について

プレバソフフロアブル5はカメムシ類には効果がないので注意する。開花後（莢伸長期以降）、ほ場でカメムシ類が確認された場合は、カメムシ類に登録のある薬剤（トクチオン乳剤など）を使用し防除に努める。

表3 小豆防除体系例（灰色かび病・菌核病・炭そ病・アズキノメイガ・食葉性鱗翅目幼虫）

防除開始時期		防除薬剤	倍率	系統名
1回目	開花始後7～10日	※1 プライア水和剤	1,000	Nフェニルカーバメート・MBC
		または オルフィンフロアブル	2,000	SDHI
2回目	1回目防除後10日	ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000	QoI
		スミチオン乳剤	1,000	有機リン
3回目	2回目防除後10日	プライア水和剤	1,000	Nフェニルカーバメート・MBC
		または カンタスドライフロアブル	1,000～1,500	SDHI

- ※1 炭そ病との同時防除の場合はプライア水和剤、菌核病を重点におく場合はオルフィンフロアブル。
 ※2 マキバカスミカメの防除適期は開花始の25～26日前後である（開花始から毎日の日積算平均気温が515～520日度に達する時期）。ほ場の開花始を確認し防除を行う。
 ※3 マメアブラムシの発生が見られたら、速やかに防除を行う。特に、生育後半は薬剤がかかりにくいいため、水量を増やすか、浸透移行性のある薬剤を選択し、効果的な防除を行う。

表4 金時・手亡防除体系例（灰色かび病・菌核病・インゲンマメゾウムシ（金時類））

防除開始時期		防除薬剤	倍率	系統名
1回目	開花始後5～7日	プライア水和剤	1,000	Nフェニルカーバメート・MBC
		または オルフィンフロアブル	2,000	SDHI
2回目	1回目防除後10日	ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000	QoI
3回目	2回目防除後10日	プライア水和剤	1,000	Nフェニルカーバメート・MBC

表5 菜豆類のインゲンマメゾウムシ

近年、インゲンマメゾウムシによる豆の食害や成虫の混入により、実需者からのクレームが増加しています。インゲンマメゾウムシの防除適期は、収穫日に近い時期（莢の緑色が完全に抜けてきた頃）での殺虫剤散布です。そのため、必ず登録のある殺虫剤を散布し、被害低減に努めましょう。また、成熟期以降は早期に収穫を行い、発生密度を増加させないようにしましょう。

防除開始時期	防除薬剤	倍率	使用時期	系統名
収穫日に近い時期 （莢の緑色が完全に抜けてきた頃）	ダントツ水溶剤	2,000	収穫前日	ネコチノイト

農作業事故防止のため、余裕を持った作業を心掛けましょう！